

◎『すべて神の御霊に導かれる者は、神の子供である。』(ロマ書第8章14節)

新『教会通信』(2019年2月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大いなるかを。

我ら神の子と称えらる。既に神の子たり、

世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。

愛する者よ、我等いま神の子たり、後ゆかん、未だ顕れず、

主の現れたまう時われら之に肖んことを知る。

我らその真の状を見るべければなり。』

(ヨハネ第一の書第3章1節2節)

禱りの中に聖書を拝読し、聖言の真理を悟りつつ“ヨハネ第一の書”まで読み進んで参りますと、此の聖言に接する事になります。

重ねて、重ねて、我らが神の子である事が強調されております。

疑うな、信ぜよ、真の事である、確信を持て! お前が神の子である事は、疑いの無い真実である!

情けない程、チッポケで愚かな人間に過ぎない我らに、天地創造の神が、聖書を通してハッキリとした聖言を以て、そう呼び掛けておられます。

◎『視よ、父の我らに賜いし愛の如何に大いなるかを。』

神と共に永遠を生きる、と言う御救いは、神の独壇場であられます。

此の“教会通信”を認めさせて頂いております私事でありますが、嘗ては真の神とは全く縁の無い者でありましたが、幼少の頃、怪我を元に入院したのを切っ掛けに付き添いをしていた母親がキリストの教えに接し、何時の間にか家族全員が御救いに与って参りました。

やがて自分が神に依って選ばれた者である事を思い知らされ、様々の現実的試練に遭いながらも常に主の恩恵と憐憫とを戴き、徐々に徐々に主イエス・キリストの真理を識る機会に恵まれて参りました。

我ら異邦人と呼ばれる者達には、主の十字架が無ければ神に近付く事も救いに与る事も無かったのであります。

主の十字架は、神の選びの中に無い者には只の躓きの石に過ぎませんが、神に選ばれた者には偉大なる神の御愛の象徴として煌々たる輝きを以て仰ぎ見る者に神の臨在と大い

なる希望を与えるものであります。

神を侮り、神の敵方であるサタンの言いなりに偶像の数々を創り、真の神を罵倒し尽くした異邦人の為にお生命を棄ててまでして愛して下さった我らの主イエス様であります。

始めから此の主イエス・キリスト様を、理解出来る者はおりません。

先ず、主イエス様が仰有った御救いに与る事から始まります。

聖書は、万国共通であります。

そこに示されている聖言は、凡てが天地を創造為された唯一の神のご計画に随って示された聖言であります。

ですから、人が勝手にその文章を書き換える事は赦されませんし、その聖言に対して人々が人間的（肉的）思想を以てあれこれ議論を戦わす事も赦されませんし、信仰に取って意味の無い事であります。

神は霊の御方であられ、我ら人間は肉的社会に生きる事を余儀なくされている現状态下に存在しておりますから、聖書の文面に理解不詳な箇所が出て来ても、霊的信仰が深く無い者には当然の事と言えます。

人間（肉）的知能で無理をして、聖書を解く必要もありません。

◎『もし知らずば其の知らざるに任せよ。』

（コリント前書第14章38節）

◎『悟りがたき所あり、無学のもの心の定まらぬ者は、
他の聖書のごとく之をも強い積きて自ら滅亡を招くなり。』

（ペテロ後書第3章16節）

聖書は他の人間の手に由るあらゆる書物、例え高尚な人生哲学であれ、他の宗教書であれ、同一視出来る物は一切ありません。

聖書の聖言を個人的解釈視しておりますと、その者の生前も死後にも怖い神の刑罰を蒙る事になります。

故に聖書は、上記ペテロ後書第3章16節に続いてこう記しております。

◎『さらば愛する者よ、汝ら預じめ之を知れば、
慎みて無法の者の迷いに誘われて己が堅き心を失わず、
ますます我らの主なる救主イエス・キリストの恩寵と
主を知る知識とに進め。』（ペテロ後3:17, 18）

冒頭ヨハネの第一の書第3章2節に

◎『主の現れたまう時われら之に肖んことを知る、
我らその真の状を見るべければなり。』

此の聖言の真理を悟るには、主イエス様のご恩寵を十分に頂戴している者でなければなりません。

主の御再臨の折、神の悦び給う究極の信仰者の状景であります。

その者は眼前に顕れた主のご威光を前にして、何と自分が其の御方と似ている事を知らされる、と言うのであります。

無論、御再臨の折には、我らは◎『主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり』（コリント後3:18）とありますから、◎『水と霊のバプテスマ』（ヨハネ3:5）に与って御救いを戴いている我らは、主と同じ霊体に栄化しているのです。

しかし、その主のお姿を視て、“ああ、似ている”と直感出来るかどうか自らに問うてみても、その確信が果たして今の自分に在るかどうか…。

されど、主は信仰薄き我らに、こう仰有って下さいます。

◎『終りのラッパ鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。

ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。』

（コリント前書第15章52節）

◎『我らの卑しき状の躰を化えて、己が栄光の躰に象らせ給わん。』

（ピリピ書第3章21節）

嗚呼、何たる主の御愛！ 感激あるのみ！ ハレルヤ！ ハレルヤ！
万難を排して、主イエス様の御憐憫の中に“神の子”として、主の御再臨に臨みたいものでございます。

さて、此の号も主の導きの中に在って、主に愛せられ主に似る為の信仰生活に必要な事柄を学ばせて頂きたいと思えます。

◎『我に對いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、

ただ天にいます我が父の御意を行う者のみ、之に入るべし。

その日おおくの者われに對いて

「主よ、主よ、我らは汝の名によりて預言し、

汝の名によりて悪鬼を逐いだし、

汝の名によりて多くの能力ある業を為ししに非ずや」と言わん。

その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、

不法をなす者よ、我を離れ去れ」と。』

（マタイ傳第7章21～23節）

「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れ去れ。」

怖ろしき怒声とも思われる、主の御言ではありませんか？

そんな御言が返って来るとは露とも思ってもいなかった者達に取って、その者たちの心情は如何ばかりであろうか、と察せられます。

“その日”とありますのは、天国に永住できるかどうかの判断が下される日、が想定されます。

単数では無く複数の、或いは集団の者達が、我らの神・主イエス様に向かって、此処には記されてはおりませんが、多分、「主よ、主よ、何で私たちの名前が天国入りの者達の中に這入っていないのですか？」と言う所から始まったと思えます。

「私たちは地上に在る時に、主の名前で預言をしたし、主の名前でサタンを逐い出したし、主の名前で沢山の不思議な御業をして来たではありませんか。どうして私たちが天国に行け

ないのですか？」

実際に彼らは此の地上に在る間、席を置いていた教団や教会の熱心な信者として、牧師や宣教師らの言うが儘に自らの貴重な時間を割いて伝道活動をしていた者達であったかも知れません。

現実に、在籍教団を名乗る者達が、小なりとは言えキリスト教の看板を掲げる私共に宣教に見える事は珍しい事ではありません。

彼(彼女)らの勇氣と熱心とには、真の教会を委ねられている牧師として些か口惜しく思う所ありますが、真理を逸脱したキリスト教の多さとその厚かましさに主のご再臨が近付きつゝある事が思い知らされます。

マタイ傳第24章3節より録されている、世界の終末期に関する主イエス様の御言には様々な状況が記されておりますが、その一番始めに、次の聖言があります事の意味に、留意したいと思います。

◎『汝の来たり給う(ご再臨)と世の終わりとは、
何の兆あるか』(マタイ24:3)との弟子達の問い掛けに

◎『汝ら人に惑わされぬように心せよ。
多くの者わが名を冒し来たり、“我はキリストなり”
と書いて多くの人を惑わさん。』(マタイ24:4)

過越の祭りと主イエス様の十字架とを二日後に控えて、主と弟子達はオリブ山に行かれ、そこで主は末の日に現れて来る世の中の情勢、人心の変化、自然界の異常事態、大患難の時代の到来、其の他の多くを語られましたが、その筆頭に上記の聖言を語られました。

末の世には、偽物のキリスト教会が数多く出現し、如何にもそれらしく装ってはいても、主イエス様ご自身が言われた御言には“我はキリストなり”とありましたように、“我はイエスなり”と真の神の御名を口にせぬ所が偽物たる証でもある、と主が言外に仰有っておられるのです。

因みに、同じ此の時の主イエス様と弟子達とを表したマルコ傳第13章5節と6節には、次のように記されております。

◎『イエス語り出で給う「なんじら人に惑わされぬように心せよ。
多くの者わが名を冒し来たり“われは夫なり”と書いて
多くの者を惑わさん。』

此処では“われは夫なり”、と代名詞が用いられております。

主イエス様は、サタンの巧妙さを思い、自らの聖名を口にされる事はありませんでした。神の教を歪めようとするのはサタン(悪魔)の常道であります。表立って堂々と聖書の全文を否定したのでは、他の偶像教と同じなので苦慮した挙げ句、真の神の御名であります【イエス】を【キリスト】としたのはサタンの悪智慧でありましょうか。

主イエス様は明確に、偽キリスト教がそうすると預言しておられます。

実際に多くのキリスト教を名乗る集団では、洗礼式を始め催し物等の開会式及び閉会

宣言に【イエス】の聖名を用いる所は少なく、それらの場合“父・子・聖霊の名”を以て為している所が多く、又【イエス】の呼称を【キリスト】と口にする所が多数のようであります。

此等の事は明らかに、コロサイ書3章17節に触れております。

◎『為す所の凡ての事、あるいは言あるいは行為、

みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ』

凡ての事は、主の聖名イエスの名に頼りて為すべし、とは、コロサイ書の著者とされておりますパウロとテモテが自分達の思念を勝手に認めたのでは無く、聖書の総ては聖霊(御霊)の示し、即ち神の御旨のみが記されている事を認識すべきであります。

さて、前述のマタイ傳第7章21～23節に戻ります。

主イエス様の伝道初期の記述であり、ユダヤ人が対象でありましたが、マタイ傳第5章から第7章までは“山上の垂訓”と呼ばれ、主に主ご自身の十字架とご復活とご昇天の後に始まるキリスト教の信仰者としての心構え等が語られております。

此の記述から、現代の信仰者である私たちに取らましても大切な事柄を、学ばせて戴きます。

当たり前の事ではあります、真の基督教徒を自認する私たちは、真の神の御名を明確に知る者でなければなりません。

確かに、新約聖書の中には【イエス】と【キリスト】とが相半ばして出て参りますが、【キリスト】は、主イエス様の職分名であり、【イエス・キリスト】と連記されておりますのは、“イエスはキリストである”即ち主イエス様は“油注がれた者”であるとの意味であります。

当時、王たる身分に就任する際には、必ず油が注がれておりました。

又その原語はヘブル語で【メシヤ】であります、旧約聖書の文中で注目すべき事は、イスラエルの歴史の中で繰り返えされる動乱の中に置かれたその民族に取って、【メシア】こそは待望された救世主であり、やがて出現する期待の存在でありました。

その御方が、ナザレ生まれの主イエス様であられます。

旧・新約聖書を通して中心的神の御意は、此の【救い主】【イエス】そして【キリスト】の顕現を以て、墮落した人類への救済が成し遂げられる事であります。

イスラエル民族だけの為では無く、我ら異邦人と謂われる全世界の人々を救いたい、とする神の御意でありました。

◎『神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、

汝等をして志望をたて、業を行わしめ給えばなり。

汝ら眩かず疑わずして、凡ての事をおこなえ、

是なんじら責むべき所なく素直にして、

此の曲れる邪悪なる時代に在りて神の瑕なき子とならん為なり。

汝らは生命の言を保ちて、世の光の如く此の時代に輝く。』

(ピリピ書第2章13～15節)

主イエス様が望んでおられる全人類への救いではありますが、その真の御救いは、主の十字架に依る贖いの御業を経て開かれた“水と霊”のバプテスマに与る事であります。

十字架にお掛かりになられる前のヨハネ傳第3章5節にて、主がユダヤ人の宰ニコデモに言われた御言

◎『イエス答え給う“まことに誠に汝に告ぐ、
人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入るに能わず。”』

水は、主の十字架でお流し下さった御血潮の事であり、霊は神の聖霊・御霊を仰有っておられます。

“水と霊”のバプテスマに与った者は、当然、神の霊を受けており、上記ピリピ書第2章13節～15節、

◎『神は御意を成さん為に汝らの衷にはたらき、』

神様の考えておられる事を成就なされる為に、私たちの衷に与えておられる御霊に働き掛けて

◎『汝等をして志望をたて、業を行わしめ給えばなり。』

私たちに信仰を通して志望を立てさせて、主の御能力に援けられながら、その希望に満ちた志に添って実現へと進ませて下さいます。

◎『なんじら眩かす疑わずして、凡ての事をおこなえ。』

一度定められた志望であるならば、その途中で如何なる障害や災いが顕れても、神が与えて下さった志望である事を疑わず、己の能力不足を眩くことも無く、ただ天地萬物の創造主であられる唯一の神を仰ぎ見て、御霊の導きと援助を戴いて一心不乱に目的に向かう事を、神様は求めておられます。

神様の働き掛けに依って信仰の中に始められた志望は、内住の聖霊の働きと相俟って協同であり、神の協賛がある事を忘れてはいけません。

我らの神・主イエス様は、私たち神の子供を此の地に在る間、真の祝福の路を歩ませようと為さってお出でであります。

何事も、自分の思惑で遣り通そうとするのでは無く、神と共に歩む事、否、時に神に先導と成って戴いて道を開いて戴く事が必要であります。

◎『是なんじら責むべき所なく素直にして、
此の曲がれる邪悪なる時代に在りて神の瑕なき子とならん為なり。
汝らは生命の言葉を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。』

ピリピ書第2章15節であります、何と幸いなる御言でありましょうか！

愛する聖徒方、皆さんは“此の曲がれる邪悪なる時代”との御言葉を、どのように捉えておられますか？

これは現代を、今の自分が置かれている環境を指している、と考える事が出来ますか？

私は、現代を末世の入り口の時代、世相のあらゆる面で是までに無かった混乱と動乱に向かう門邊の時代、即ち主の御再臨を間近に控えた時代、と主の御霊を通じて導かれております。

真まことの神の子供は、真まことの神がお選びうつわになられた祝福の器うつわであります。
神はその者を、愛にんたいと忍耐にんたいを以て神の子ふさわに相応ふさわしく教育をなさいます。
偶像教ぐうぞうきょうとの交わりまじを厭いとわず真まことの神を受け入れようなとしない者達にくてきが中心なを成す肉にく的社会的てきの中を、私たちが其その者達そのようにスイスイと生き抜く事は神様がお許ゆるしにはなりません。
神に選ばれた者には、此の地に於いて、凡てに自由すべの選択権せんたくけんが与えられている訳ではありません。

◎『我われキリストと偕ともに十字架につけられたり。
最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我われが内うちに在りて生くるなり。』

(ガラテヤ書第2章20節)

主イエス様は、純じゆん粋すいな愛の神であられ、私たちの人生を私達さいぜんに取って最善さいぜんを願ねがい、決して下手へたな事はなさない神様であられます。

私達も又、此の身みを以て神の栄光えいこうを顕あらわすように心懸こころがけて参りましょう。

主イエス様の恩寵めぐみ、皆様方ともと偕ともに在らん事を、祈ります。 ハレルヤ！

(2019・2・5 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)